岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 186

川 入 遺 跡

一般県道川入巖井線道路改築に伴う発掘調査

2 0 0 4

岡 山 県 教 育 委 員 会

序

岡山市の西端、足守川左岸に位置する川入から中撫川にかけての地区は、現在水田や住宅地が広がっていますが、かつては「吉備穴海」とよばれる内海が入り込んでおり、川入遺跡や中撫川遺跡はこの内海に面していました。

これらの遺跡は、かつてＪＲ山陽新幹線およびその北側に隣接する都市計画道路（富本町・三田線）の建設、市道（中撫川平野線）建設、一般県道（吉備津松島線）道路改築などに伴って発掘調査が実施され、弥生時代以降各時代にわたる遺構が濃い密度で検出されています。そのうち、県下でも珍しい飛鳥時代の瓦の出土や、奈良・平安時代の倉庫群や築地塀などの発見があり、古代の港に関係する遺跡として特に注目されています。

このたび、川入遺跡の範囲に含まれるＪＲ山陽新幹線の南側に一般県道（川入巖井線）の道路改築が計画されました。岡山県教育委員会は、過去の発掘調査の成果によって、その一部区間に遺構・遺物の存在が予想されるため、工事主体の岡山県岡山地方振興局と遺跡の保存協議を重ねて参りました。しかし、最終的には道路建設により遺跡が破壊される部分について、やむなく記録保存の処置をとることになった次第です。

このたびの発掘調査では、遺跡が立地する微高地縁辺部の様子がある程度具体的に捉えられ、さらに、古代に構築された杭列の存在なども明らかになりました。

本報告書が吉備地方の歴史研究の一助となり、また、埋蔵文化財の保護・保存のため有効に活用されることを願ってやみません。

発掘調査の実施ならびに報告書の作成にあたりましては、関係各位から多大な御理解と御協力を賜りました。末筆ながら、衷心より厚くお礼申し上げます。

平成16月12月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　正　岡　睦　夫

例　　言

1　本書は、一般県道川入巌井線道路改築に伴い、岡山県教育委員会が岡山地方振興局の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、川入遺跡の発掘調査報告書である。

2　川入遺跡は、岡山市川入に所在する。

3　発掘調査は平成15年４月～８月に柳瀬昭彦・内藤善史・小松原基弘が担当して実施した。面積は1,775㎡である。

4　本書の作成は平成15年度９月～12月に実施し、小松原が担当した。

5　本書の執筆は、第１章第１節を内藤が、その他を小松原が担当し、全体の編集は小松原が行った。

6　遺跡の自然科学分析等（土壌分析・樹種同定）はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、成果報告（付載 奈良時代の杭列遺構に関する古植物学的検討）を得た。

7　遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。

8　本書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡　　例

1　本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は国土座標第Ⅴ系の座標北である。本書記載の座標値はすべて日本測地系に準拠しており、抄録に記載した経緯度についても同じである。

2　本書記載の遺構・遺物の図には個別にその縮尺率を記しているが、基本的には次のとおり統一している。

　溝断面：1/30　1/60　　土器：1/4　　石器・石製品：1/2　1/3

3　本書記載の遺物の番号については、土器には番号だけを付け、石器・石製品にはSを番号の前に付けている。

4　本書記載の土器のうち、中軸線両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。

5　本書記載の土層の色調は、担当者の記述による。

6　第４図は国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「総社東部」「倉敷」を複製し、加筆したものである。

7　本書における時期区分について、弥生時代・古墳時代は、山陽自動車道建設に伴う発掘調査を実施した津寺遺跡の、次の発掘調査報告書に準拠した。

　「津寺遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98　岡山県教育委員会　1995年

　その他の時期については一般的な政治史区分に準拠しているが、おおむね古代は７世紀後半から12世紀中頃まで、中世は12世紀後半から16世紀中頃までと捉えている。

本 文 目 次

序
例言
凡例
目次
第１章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査および整理の体制 …… 1
　第３節　調査および整理の経過 …… 2
　第４節　日誌抄 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 …… 5
第３章　調査の概要 …… 7
　第１節　八幡西調査区 …… 7
　　１　調査の概要 …… 7
　　２　八幡西調査区の遺構・遺物 …… 9
　第２節　入溝調査区 …… 12
　　１　調査の概要 …… 12
　　２　入溝調査区の遺構・遺物 …… 13
第４章　まとめ …… 15
　第１節　発掘調査の成果 …… 15
　第２節　杭列について …… 15
付載　奈良時代の杭列遺構に関する古植物学的検討 …… 16
図版
報告書抄録

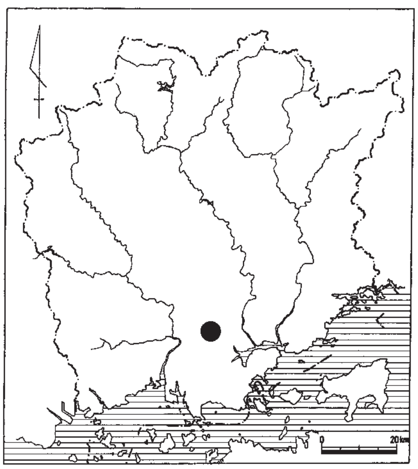
挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図（1/2,000,000）…… 目次頁
第２図　調査区位置図（1/2,000）
　・調査区土層柱状模式図（1/80）…… 3
第３図　過去２回の調査報告図との合成図
　（1/400）…… 4
第４図　周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 6
第５図　八幡西１区遺構配置図（1/400）…… 7
第６図　八幡西１区トレンチ土層断面図
　（1/100）…… 7
第７図　八幡西２区遺構配置図（1/400）…… 8
第８図　八幡西２区南側壁土層断面図（1/100）
　…… 8

第９図　八幡西３区遺構配置図（1/400）‥ 8
第10図　八幡西３区南側壁土層断面図（1/100）…… 9
第11図　溝１断面図（1/60）…… 9
第12図　溝１出土遺物（1/4）…… 9
第13図　杭列（1/80）…… 10
第14図　杭列出土遺物（1/4）…… 11
第15図　八幡西調査区出土遺物その１（1/4）…… 11
第16図　八幡西調査区出土遺物その２（1/4・1/2・1/3）…… 12
第17図　入溝１区遺構配置図（1/200）…… 13
第18図　入溝１区北側壁土層断面図（1/100）…… 13
第19図　溝１断面図（1/30）…… 13
第20図　入溝２区遺構配置図（1/200）…… 14
第21図　溝２断面図（1/30）…… 14
第22図　入溝２区北側壁土層断面図（1/100）…… 14
第23図　入溝調査区出土遺物（1/4）…… 14

図 版 目 次

図版１－１　八幡西１区東半（西から）
　　　２　八幡西１区西半（西から）
　　　３　八幡西３区溝１（南西から）
図版２－１　八幡西２区杭列（東から）
　　　２　八幡西２区杭列（北から）
　　　３　八幡西２区杭列土層断面（北から）
図版３－１　入溝１区東半（東から）
　　　２　入溝１区溝１・たわみ（北から）
　　　３　入溝２区溝２（北から）
図版４－１　八幡西３区溝１出土弥生土器
　　　２　八幡西２区杭列出土須恵器・土師器
　　　３　遺構に伴わない遺物



第１図　遺跡位置図（1/2,000,000）

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

一般県道川入巖井線は、岡山市と倉敷市という県内の二大都市を結ぶ主要道路の一つである。岡山市街地を通る区間については４車線化されているものの、その西方でＪＲ山陽新幹線の北側を並走する区間は未だ２車線であり、朝夕を中心に交通渋滞が著しくなっている。

平成12年５月に岡山県岡山地方振興局から岡山県教育庁文化課（平成15年度から文化財課）に当該地の改築計画が示され、遺跡包蔵地についての照会があった。これに対し文化課（現文化財課）は、対象地域はＪＲ山陽新幹線の建設および新幹線の北側に並行する一般県道川入巖井線（調査時、都市計画道路富本町・三田線）の二度の発掘調査により遺跡の存在が明らかなことを回答した。

その後、保存協議を重ねた結果、岡山県教育委員会は、平成15年３月20日付けで岡山県岡山地方振興局長からの発掘通知を受理し、遺跡の取り扱いについては、工事着手前に岡山県古代吉備文化財センターにより発掘調査を実施し、その結果重要な遺構などが発見された場合は、その保存などについて別途協議を行うこととし、記録保存の措置をとることとなった。

第２節　調査および整理の体制

発掘調査は平成15年４月から８月まで、岡山県古代吉備文化財センターの調査員３名で実施し、整理・報告書作成作業は平成15年９月から12月まで、同調査員１名で行った。次に組織の体制を記す。

平成15年度

岡山県教育委員会

教 育 長　宮野　正司

岡山県教育庁

教育次長　三浦　一男

〈文化財課〉

課　　長　西山　　猛

課長代理　田村　啓介

課長補佐（埋蔵文化財係長）　平井　泰男

文化財保護主任　尾上　元規

主　　事　浜原　浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　正岡　睦夫

次　　長　藤川　洋二

文化財保護参事　松本　和男

〈総務課〉

課　　長　中田　哲雄

課長補佐（総務係長）　笏本　弘忠

主　　任　小坂　文男

〈調査第三課〉

課　　長　柳瀬　昭彦（調査担当）

課長補佐（第二係長）　下澤　公明

文化財保護主幹　内藤　善史（調査担当）

文化財保護主査　小松原基弘（調査・報告書担当）

第３節　調査および整理の経過

調査対象地はＪＲ庭瀬駅から北に約1.3㎞の地点で、東西に走るＪＲ山陽新幹線線路敷高架に隣接する。調査範囲は、東は八幡神社の建つ低丘陵の西裾から、西は県道川入巌井線・真金吉備線の川入交差点南までの東西約500ｍの間で、新幹線高架南側の幅約10ｍの部分である。過去２回の調査に倣い、東半を八幡西調査区、西半を入溝調査区とし、さらにそれぞれ西から順に八幡西１区・２区・３区、入溝１区・２区と細分して調査区を設定した。

調査は平成15年４月から着手し、調査範囲の中で最も東に位置する八幡西３区の調査から行った。同時に、過去２回の調査成果を踏まえて、調査範囲全域にトレンチを設定して掘り下げ、土層の堆積状況と遺物の有無を確認した。

その結果、調査範囲の大部分が微高地縁辺部もしくは湿地の様相を呈していることが判明した。そこで、当初調査範囲全域で全面調査する予定であった計画を変更し、トレンチ調査で基盤層と考えられる土層が確認できた範囲について全面調査を実施することとし、その他の範囲についてはトレンチ調査の成果により旧地形を復元するにとどめた。

調査では、調査範囲のほぼ全域が粘土質の土層であったため、人力による掘削は難渋を極めた。また、田植えの時期以降は、３日ごとに水田への引水のため周辺の用水の水位が上昇し、調査区へ水が流入することもしばしばで、調査期間中は終始排水作業に追われた感があった。

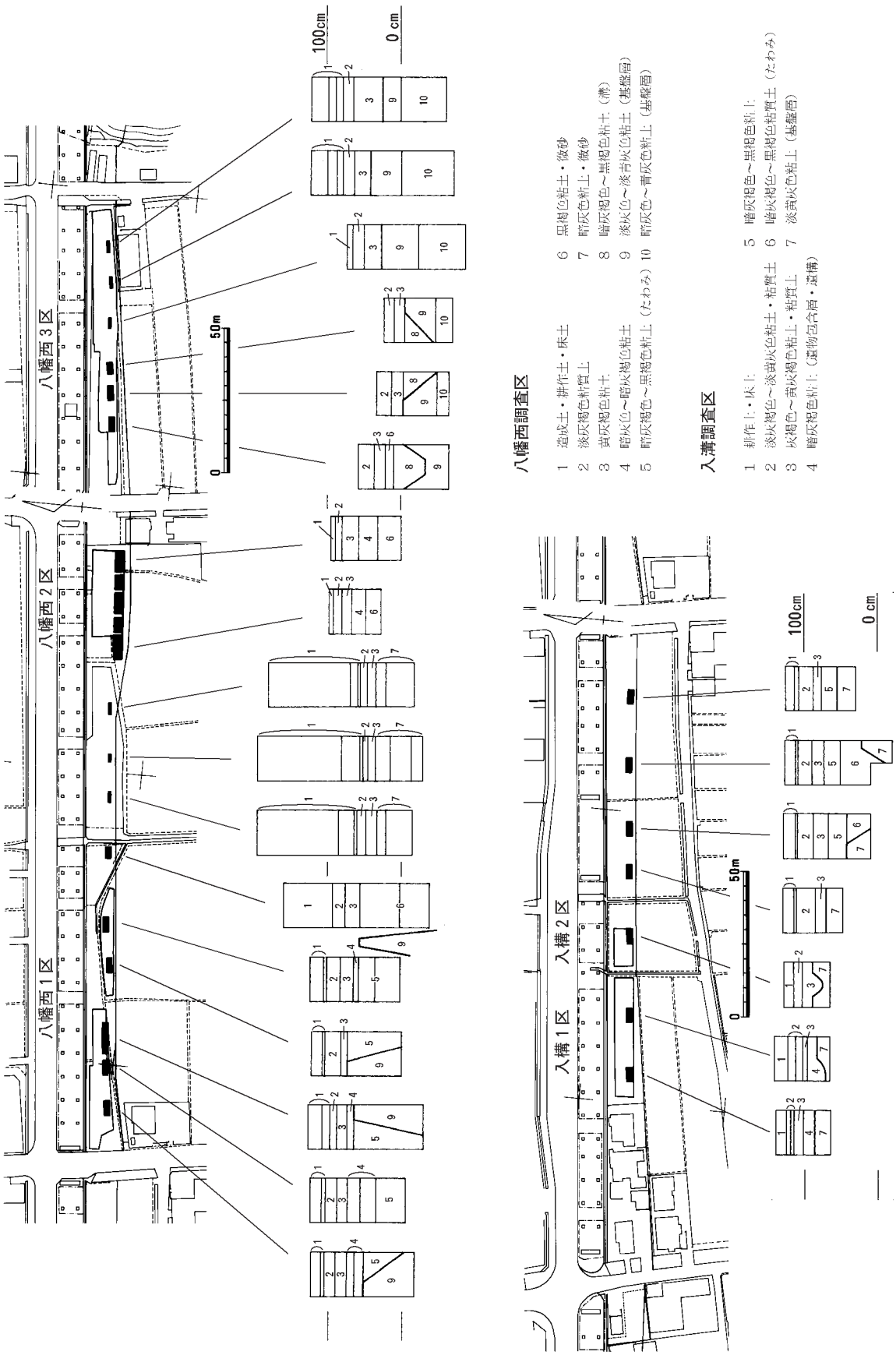
調査成果については、入溝１・２区で前回調査で確認された溝と同様の溝を、八幡西２区の東端において前回・前々回の調査で確認された杭列の延長をそれぞれ検出するなど、過去２回の調査成果を追認したほか、入溝１区においては明確な微高地の基盤層を確認した。また、八幡西３区では大きな溝の底から弥生時代前期の土器を見いだした。遺物量はコンテナ５箱、遺構数はたわみ状のものまで含めて15であった。調査は８月に終了した。

整理・報告書作成作業については、遺物の洗浄・注記は調査期間中にほぼ終了していたため、９月から遺物の復元や実測、遺構図面の整理、浄書および文章執筆を、現場事務所と文化財センターにおいて行った。作業は12月で終了した。

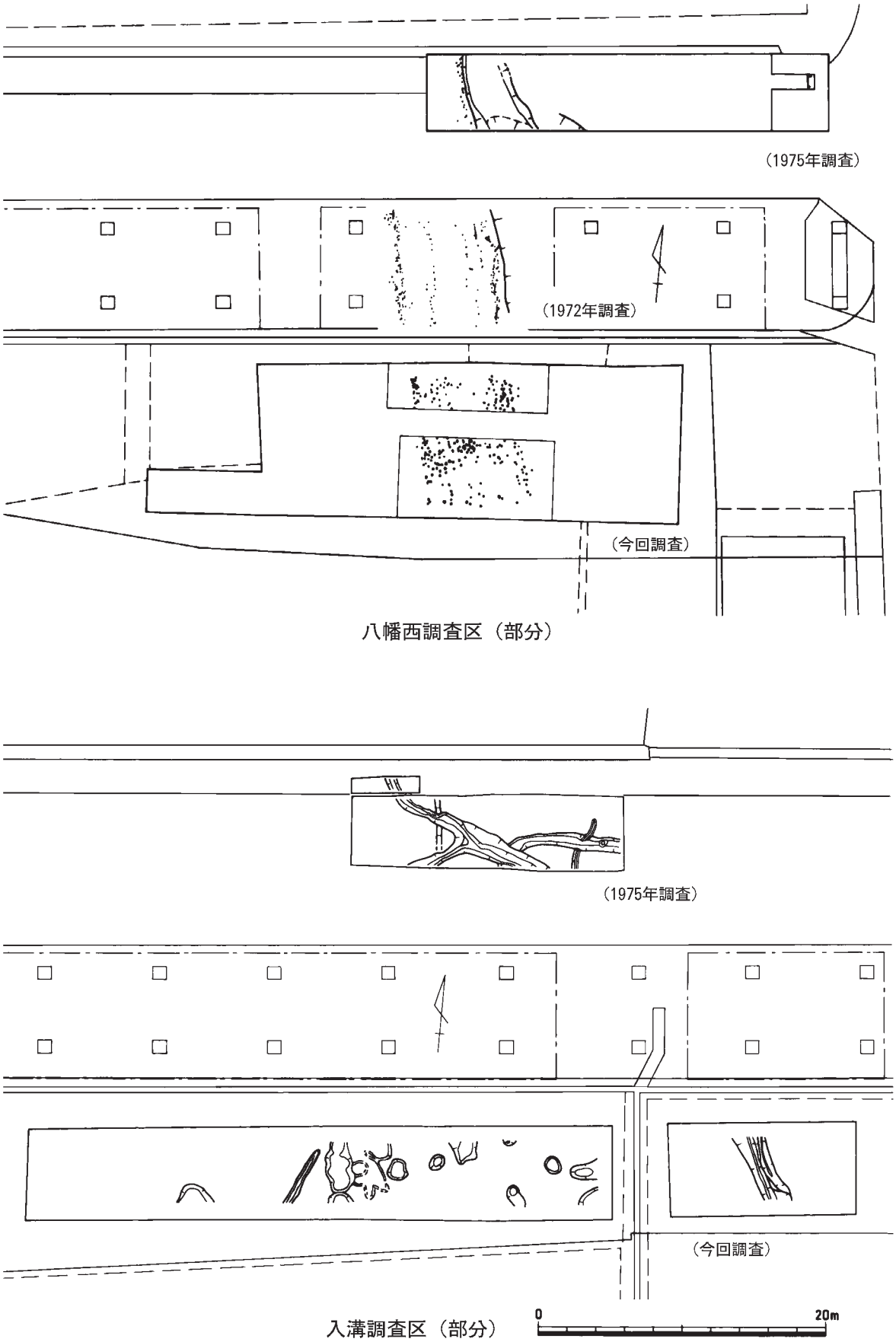
第４節　日誌抄

平成15年度

４月１日　調査準備開始
４月７日　八幡西３区調査開始。
５月26日　八幡西２区調査開始。
６月12日　八幡西３区調査終了。
６月16日　八幡西１区調査開始。
７月28日　入溝１区調査開始。
７月30日　入溝２区調査開始。
８月18日　入溝２区調査終了。
８月25日　八幡西１区調査終了。
　　入溝１区調査終了。
８月28日　八幡西２区調査終了。
８月29日　調査現場撤収。
９月１日　整理・報告書作成作業開始。
12月31日　整理・報告書作成作業終了。



第２図　調査区位置図（1/2,000）・調査区土層柱状模式図（1/80）



第３図　過去２回の調査報告図との合成図（1/400）

第２章　遺跡の位置と環境

岡山県南部の中央を流れる足守川は吉備高原の高陣山に水源を発し、砂川・笹ヶ瀬川などと合流して児島湖に注ぐ流路延長24.4kmの川である。上流域の山裾部では扇状地の発達が顕著であるが、下流域では自然堤防と後背湿地が並ぶ沖積平野が広がっている。したがって、下流域の遺跡は自然堤防である微高地上に位置することが多い。川入遺跡も足守川下流域の左岸にあたり、旧河道によって形成された微高地上に立地する。かつては、深く入り込んでいた内海に面した旧足守川の河口付近に位置していたと考えられる。遺跡の北東には吉備中山とよばれる独立丘陵、北西には楯築墳丘墓、王墓山古墳群など多くの遺跡が所在する低丘陵がある。また南方には早島丘陵が位置するが、これはかつて瀬戸内海に浮かぶ島であった。

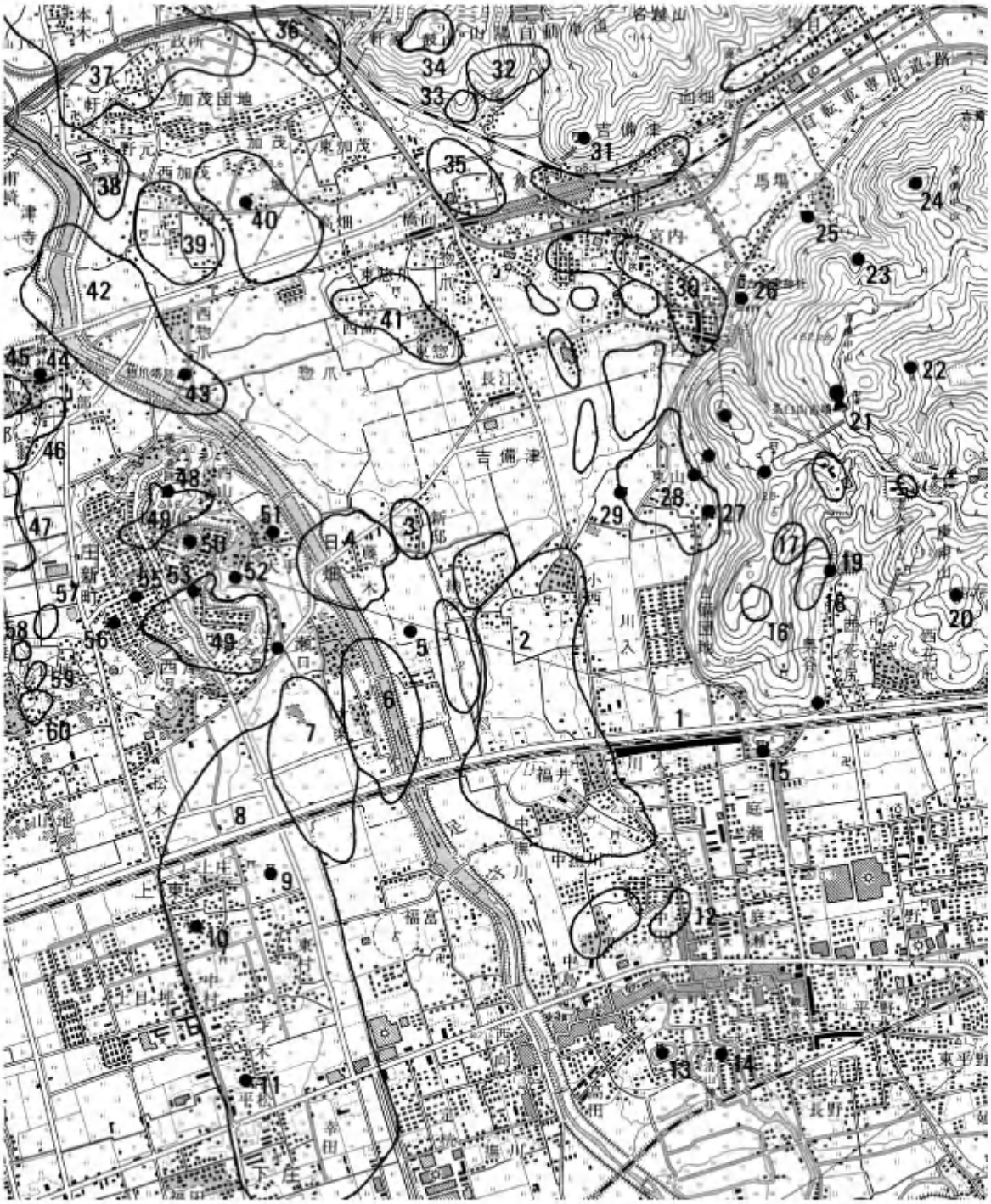
足守川中流域の丘陵部では旧石器時代のナイフ形石器などが出土しているが、遺構は未だ検出されていない。集落が形成されるのは縄文時代中期以降で、大内田貝塚や西尾貝塚などが丘陵裾部に立地する。後期以降の低地への進出は稲作の開始と深く関わっていると考えられ、晩期の吉野口遺跡では耕作具の可能性のある石鍬が出土し、土層からはプラントオパールが検出されている。

弥生時代に入ると沖積平野に営まれる集落の数は増加し、岩倉遺跡・東山遺跡などで前期の遺構・遺物が確認され、川入遺跡でも同時期の遺物が見つかっている。中期後半からは遺跡数の増加が著しくなり、足守川中・下流域では高塚遺跡、津寺遺跡、足守川遺跡群、上東遺跡などの集落が営まれ、それらは後期に至って拠点集落へと発展し古墳時代まで存続する。川入遺跡も同様にこの時期に集落としての一つのピークを迎える。後期後半には拠点集落を母胎に、楯築墳丘墓や鯉喰神社墳丘墓、矢藤治山墳丘墓など、傑出した首長の存在を窺わせる墳墓が築かれ、特殊器台・特殊壺を用いた共通の葬送儀礼がなされた。前方後円墳出現期には矢部大坑古墳、中山茶臼山古墳が築造されるが、続く尾上車山古墳以後、首長墳の立地は内陸部に移る。前期の集落遺跡も中期には数を減ずる。後期には矢部古墳群、前池内古墳群、王墓山古墳群など丘陵部で群集墳の築造が盛んとなる。

古代の足守川流域には日畑廃寺、惣爪廃寺などの古代寺院や、津寺遺跡、矢部遺跡など官衙に関わる遺跡が集中する。川入遺跡の所在地は古代の備中国賀夜郡と都宇郡の郡境に当たり、過去の調査で築地状遺構や平城宮式瓦が見つかっていることから、公的な港湾施設の存在が指摘されている。また、中撫川遺跡で出土した飛鳥期の軒丸瓦は、この地が瓦の積出港として機能していたことを示唆している。そして、中世には物流の活発な臨海性の集落であったと考えられる川入遺跡の周辺も、近世にかけて大規模な新田開発が行われ、内海の陸地化が進展した。

主要参考文献

正岡睦夫ほか「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』２　岡山県教育委員会　1974
柳瀬昭彦ほか「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会　1977
亀山行雄ほか「津寺遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116　岡山県教育委員会　1997
草原孝典『吉野口遺跡』岡山市教育委員会　1997
下澤公明ほか「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』158　岡山県教育委員会　2001



1　調査地
2　川入遺跡
3　新邸遺跡
4　日畑橋遺跡
5　柿梨堂遺跡
6　才楽遺跡
7　岩倉遺跡
8　上東遺跡
9　荒神古墳
10　庄城跡
11　平松城跡
12　庭瀬川崎遺跡
13　撫川城跡
14　庭瀬城跡
15　八幡神社貝塚
16　向山古墳群
17　山神下古墳群
18　奥谷古墳群
19　観音古墳
20　矢藤治山墳丘墓
21　中山茶臼山古墳
22　石舟塚古墳
23　高麗寺跡
24　竜王山経塚
25　鼻ぐり塚古墳
26　如宝経塔下古墳
27　如真堂遺跡
28　東山遺跡
29　伝賀陽氏館跡
30　吉野口遺跡
31　真城寺裏山古墳
32　杉尾古墳群
33　杉尾西遺跡
・杉尾西古墳群
34　鼓山古墳群
・鼓山城跡
35　吉備津奥田遺跡
36　高松原古才遺跡
・立田遺跡
37　津寺一軒屋遺跡
・津寺三本木遺跡
・加茂政所遺跡
38　津寺遺跡
39　幸利神社遺跡
40　加茂城跡
41　高田遺跡
42　足守川加茂遺跡
・矢部南向遺跡
43　惣爪廃寺
44　鯉喰神社墳丘墓
45　矢部遺跡
46　矢部寺田遺跡
47　矢部伊能軒遺跡
48　栖築墳丘墓
49　王墓山古墳群
50　法伝山古墳
51　日幡城跡
52　日畑廃寺
53　王墓山古墳
54　西尾貝塚
55　女男岩遺跡
56　辻山出遺跡
57　伊能軒池南東遺跡
58　若宮神社東遺跡
59　山地北遺跡
60　山地遺跡

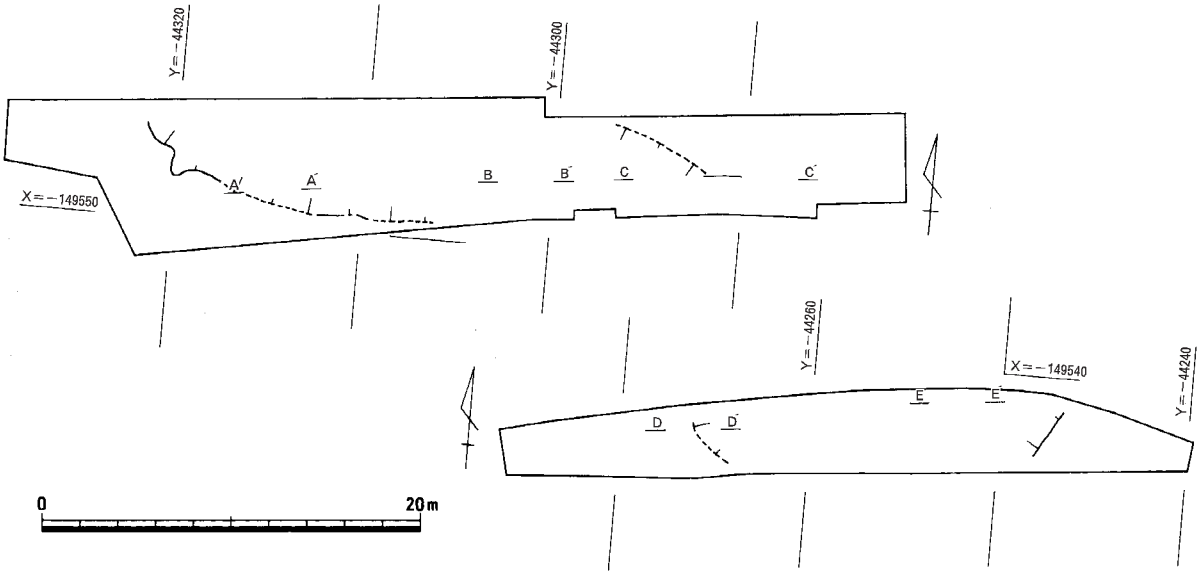
第４図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

第３章　調査の概要

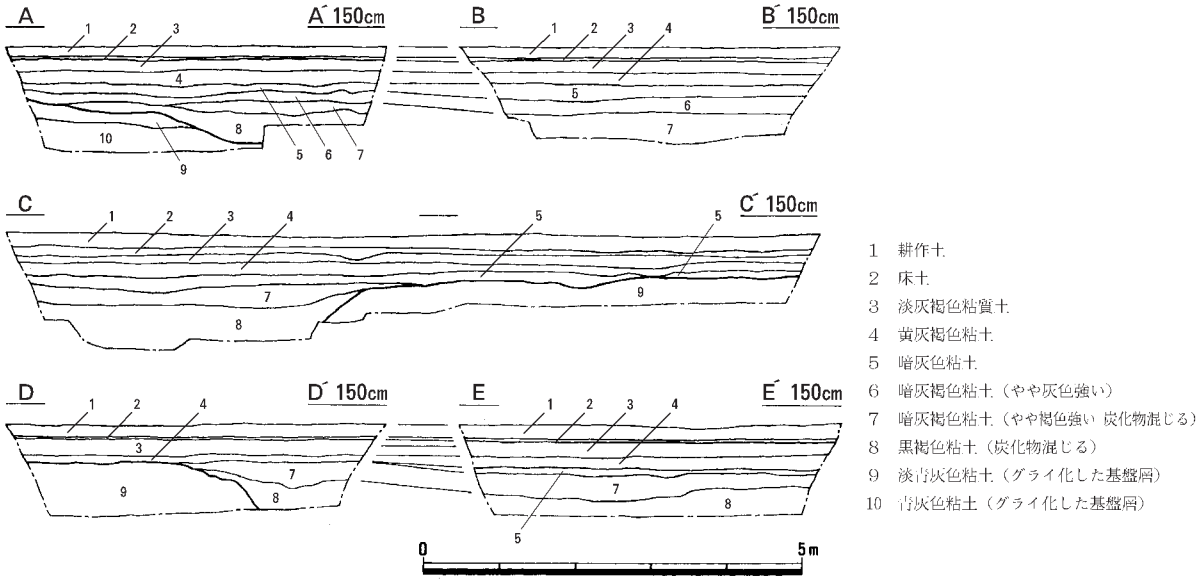
第１節　八幡西調査区

１ 調査の概要

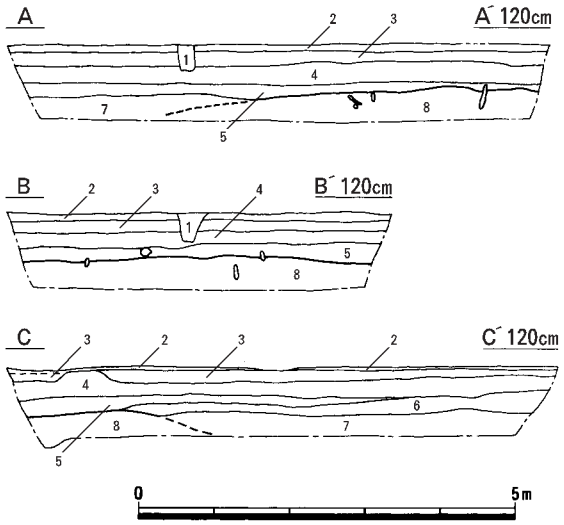
八幡西調査区は調査対象地東半の長さ約330ｍの範囲である。西から八幡西１区・八幡西２区・八幡西３区に細分した。各区の土層の基本的な層序はほぼ共通で、現耕作土・同床土直下に中・近世の



第５図　八幡西１区遺構配置図（1/400）

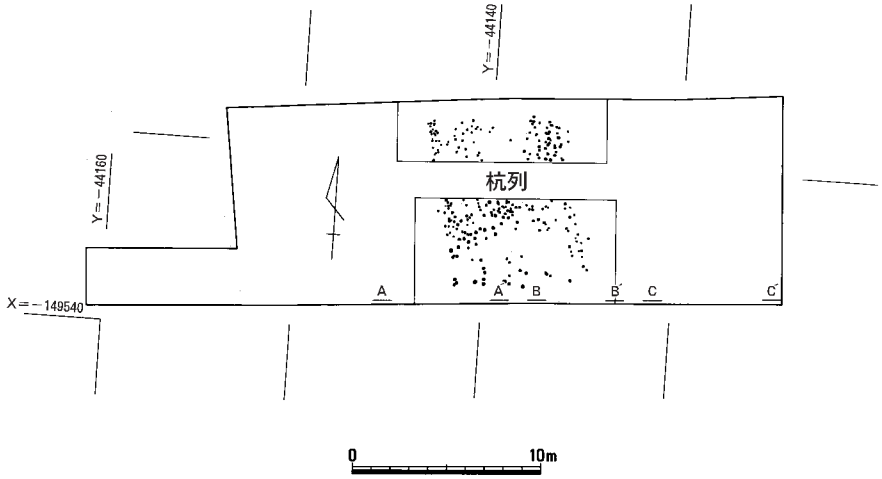


第６図　八幡西１区トレンチ土層断面図（1/100）

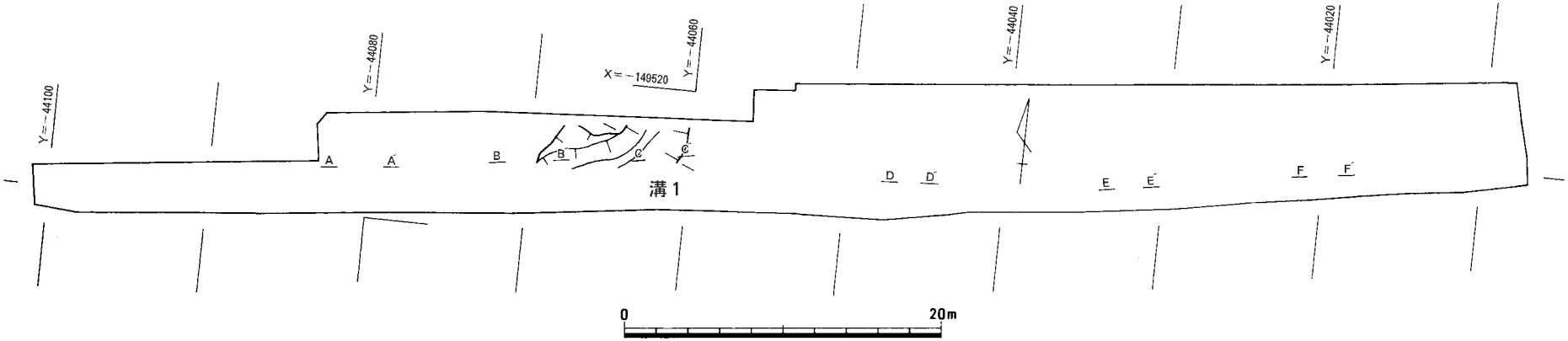


1　暗渠
2　床土
3　淡灰褐色粘質土
4　黄灰褐色粘土
5　暗灰褐色砂質土
6　暗灰褐色粘土
7　黒褐色粘土
8　黒褐色粘土（炭化物・木片混じる）

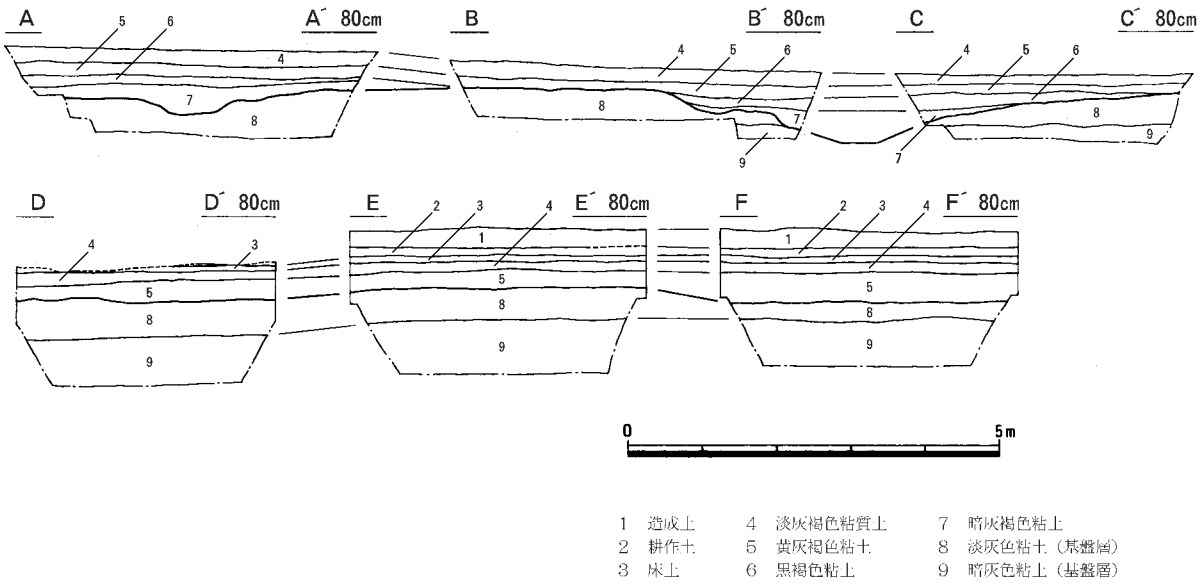
第８図　八幡西２区南側壁土層断面図（1/100）



第７図　八幡西２区遺構配置図（1/400）

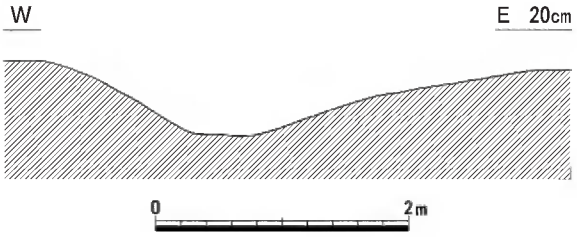


第９図　八幡西３区遺構配置図（1/400）

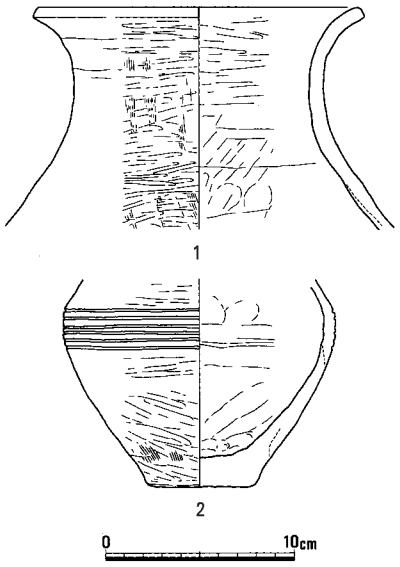


第10図　八幡西３区南側壁土層断面図（1/100）

土器・陶磁器などを少量包含する淡灰褐色粘土層、その下層にほとんど遺物を含まない黄灰褐色粘土層、さらにその下に基盤層と考えられる淡灰色粘土層を確認した。明確な基盤層が確認できない部分では黒褐色粘土層が堆積しており、炭化した植物遺体が混じっていた。調査区周辺は古くから湿地帯が広がっており、徐々に水田化されたことを窺わせる状況であった。八幡西１区では、トレンチ調査で確認した傾斜部分を一部拡張して掘り下げたところ、不定形の大きな窪みを示す広がりがみられた。埋土が全て粘土質の土層で砂が入らない。湿地帯に点在する沼のようなものであろう。八幡西２区東端のトレンチでは、過去２回の調査でも検出された杭列が確認できたので、杭列の広がる部分を全面的に掘り下げ、その範囲を確認した。八幡西３区では、基盤層まで掘り下げたところで大きな溝が検出され、その底からは弥生時代前期の土器が出土した。



第11図　溝１断面図（1/60）



第12図　溝１出土遺物（1/4）

２　八幡西調査区の遺構・遺物

溝１（第９・11・12図、図版１－３）

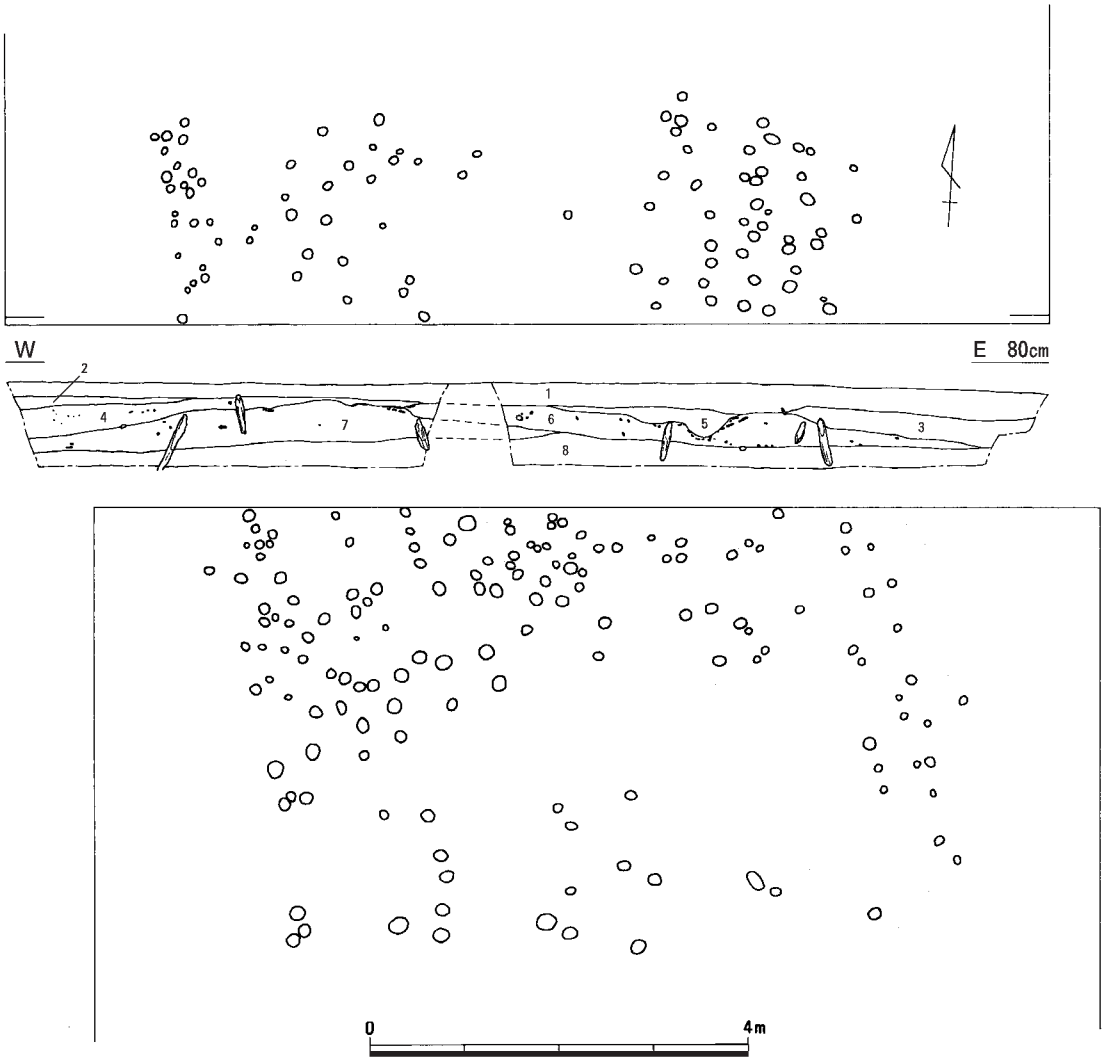
溝１は八幡西３区のほぼ中央で検出した。北東方向から南西方向にのびている。幅は約４m、深さは検出面から60cmを測る。埋土は暗灰褐色～黒褐色粘土で葦のたぐいと思われる植物遺体や炭化

物を含み、杭の一部とみられる木片が底近くから出土した。１・２は溝１の底で出土した。１は壺の口縁部から肩部にかけての破片である。外面はハケメ・ヘラミガキ調整が見られる。２は壺の胴部から底部の破片である。胴部最大径を測る部分に６条のヘラ描き沈線が施されている。内外面とも器壁が荒れているが、外面に横方向のヘラミガキ調整が観察できる。いずれも弥・前・Ⅲの土器と考えられる。周辺に明確な遺構もなく、これらの遺物は流入し二次的に堆積したものであろう。

杭列（第７・13・14図、図版２）

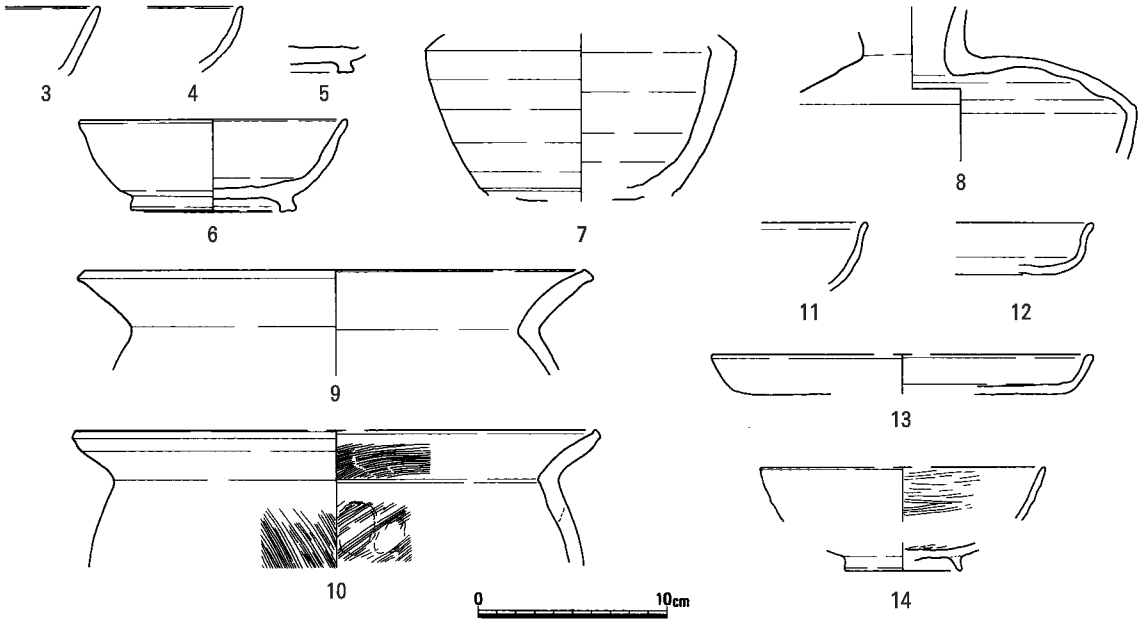
杭列は八幡西２区の東端で検出した。北西から南東方向にのびており、過去２回の調査で検出された杭列の延長と考えられる。幅約7.5ｍの低い土手状をなす範囲で直径５～15㎝の杭を打ち込み、その間に小枝・樹皮を敷いている。杭を打ち込む方向に規則性はみられず、杭の配置は中央が空疎で東西端に集中する傾向がある。過去２回の調査報告にあるような杭列東側の溝は今回の調査では確認できなかった。

杭列に伴う遺物のほとんどは、小枝・樹皮類を検出している際に埋土に混じって出土した。８世紀



1　灰褐色粘質土
2　暗灰色粘土
3　暗灰色粘質土
4　暗灰色粘質土
5　暗灰色粘土
6　暗灰褐色粘土（炭化物・木片混じる）
7　暗灰色粘土（炭化物・木片混じる）
8　灰色粘土

第13図　杭列（1/80）

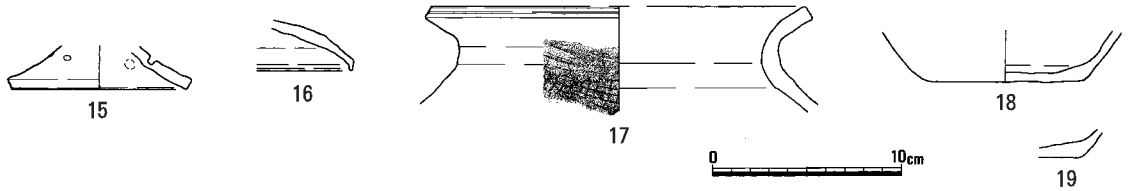


第14図　杭列出土遺物（1/4）

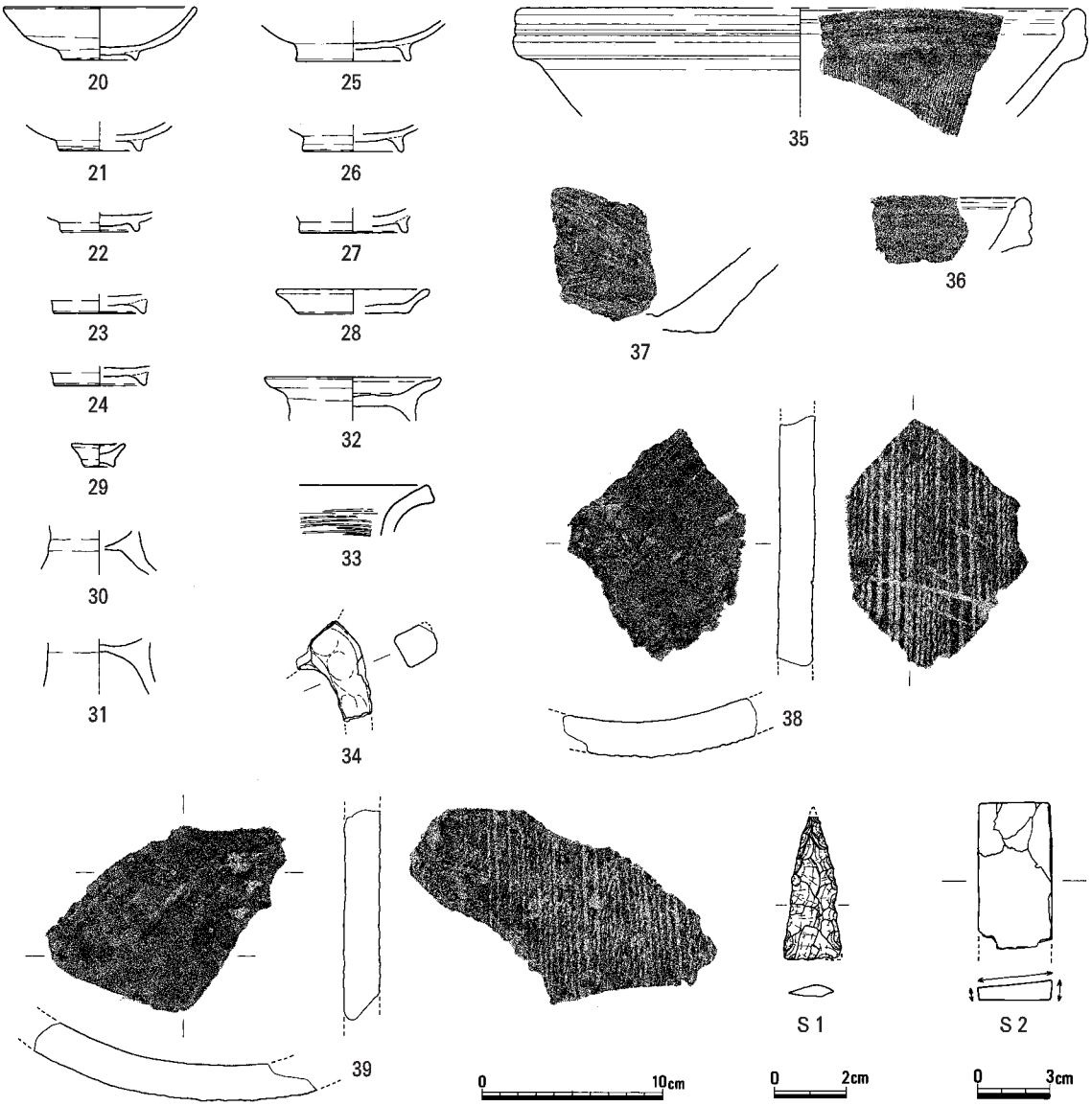
代の須恵器・土師器が大部分を占める。図示したもののうち３～８は須恵器、９～13は土師器である。３～６は杯で、このうち６はほぼ完形に近い状態で出土した。焼成は良好で器壁の一部に自然釉が見られる。７・８は第８層の灰色粘土層の上面から出土した。11・12の杯は、内外面とも赤色顔料の塗彩が観察できる。14は黒色土器で、第６層の暗灰褐色粘質土層を掘り下げ中に出土した。しかし、土層を面的に捉えることが難しく、取り上げ後に黒色土器と確認できたため、確実に杭列に伴うかどうか不明である。出土遺物としては、他に鉄滓やヒシの実、種子類も見られた。遺物の出土状況からみて、この杭列の築造年代は奈良時代と考えられる。

遺構に伴わない遺物（第15・16図）

ここに図示した遺物のほとんどが耕作土・床土とその下層の淡灰褐色粘質土層から出土した。15は八幡西３区の耕作土から出土した弥生土器の脚付土器か高杯の脚部の破片。16は八幡西３区出土の須恵器の杯蓋の破片、17は八幡西２区出土の須恵器の甕で外面胴部に格子目の敲き具痕が観察できる。18は八幡西２区、19は八幡西３区出土の土師器杯。土師質土器は21・32が八幡西１区出土、20・25・26が八幡西２区出土、22～24・27～31が八幡西３区出土である。29は手づくねでつくられた杯。35～37は八幡西２区出土の備前焼のすり鉢。38・39は八幡西２区出土の平瓦で凸面に荒い縄目が観察できる。38の凹面には布目痕が見える。Ｓ１は八幡西３区の黄灰褐色粘土層直上から出土したサヌカイト製の石鏃である。Ｓ２は八幡西２区出土の粘板岩質の砥石である。



第15図　八幡西調査区出土遺物その１（1/4）



第16図　八幡西調査区出土遺物その２（1/4・1/2・1/3）

第２節　入溝調査区

１ 調査の概要

入溝調査区は調査対象地の西半約170mの範囲である。西から順に入溝１区・入溝２区を設定した。

入溝１区は前回調査で溝が数条検出された入溝調査区の真南に当たり、基盤層も明確であったので全面調査を行った。その結果、溝１条を検出したほか、浅いたわみ状の窪みを数カ所で検出したが、人為的な遺構として捉えることはできなかった。暗灰褐色粘土層およびたわみの上面から古墳時代の土師器が少量出土している。

入溝２区については、トレンチ調査による土層確認の結果、基盤層とみられる層は確認できたもの

の、出土遺物も少なく、特に東半では八幡西１区と同様に湿地または沼地の様相を呈することが明らかになった。そこで、入溝１区に隣接する微高地縁辺部と考えられる部分について全面調査を実施した。包含層と考えられる暗灰褐色粘質土層も一部で削平されており、遺物量は少なかった。溝１条を検出している。

２　入溝調査区の遺構・遺物

溝１（第17・19図、図版３－２）

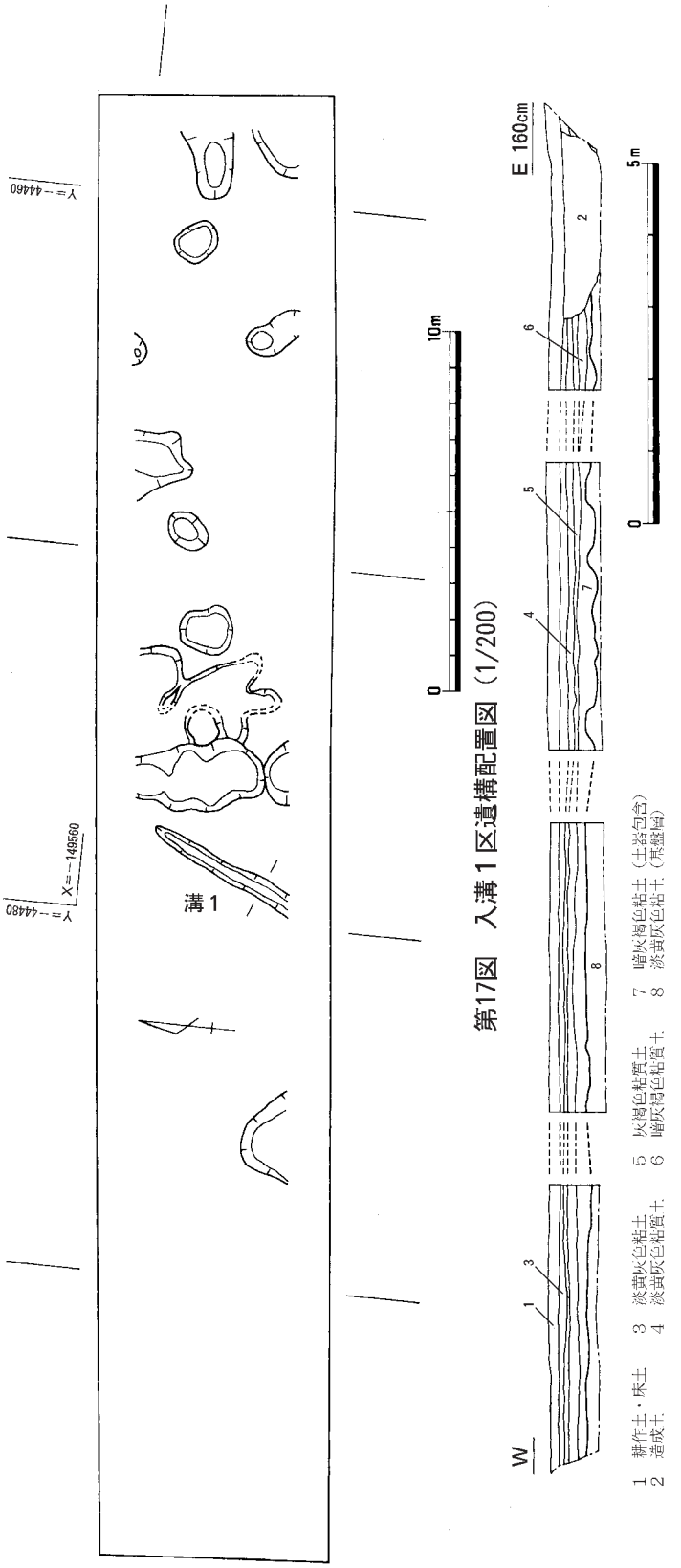
入溝１区のほぼ中央で検出した。北東から南西方向に走る。底に近い部分が残っている程度で、幅は50cm前後、深さは検出面から13cmを測る。遺物もなく時期は不明である。

溝２（第20・21図、図版３－３）

入溝２区のほぼ中央で検出した。北西から南東方向に走り、幅約1.5～２ｍ、深さは検出面から25～30cm前後を測る。前回調査の入溝調査区で検出された溝と方向は合致する。出土遺物が土器小片少量のため、時期は不明である。

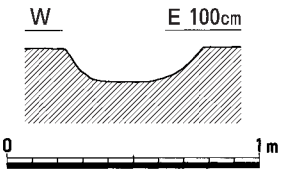
入溝調査区出土の遺物（第23図）

土師器は40～43で、40は壺の底部である。41は甕で、外面は胴部にハケメ調整、内面は器壁が摩滅しており細かい調整は不

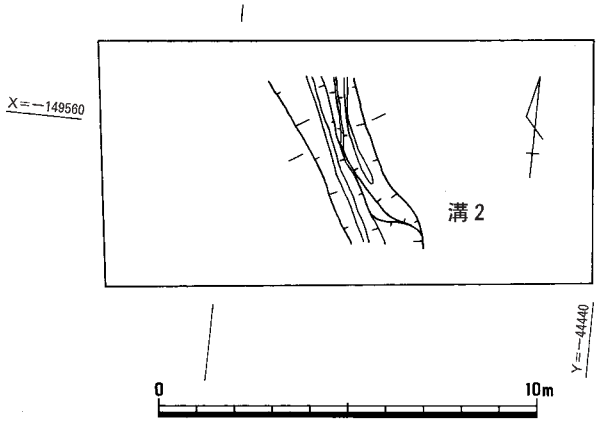


第17図　入溝１区遺構配置図（1/200）

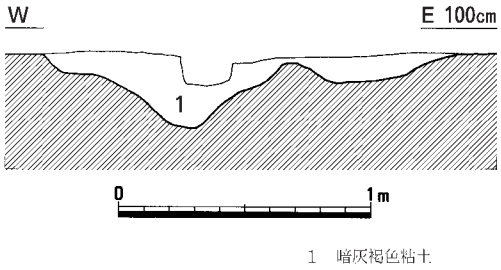
第18図　入溝１区北側壁土層断面図（1/100）



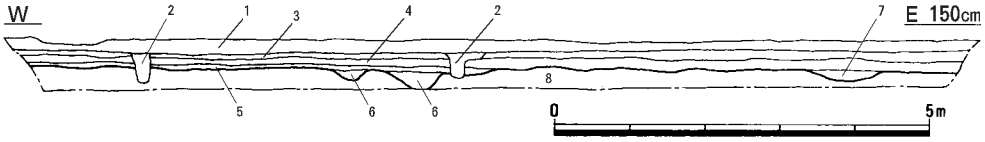
第19図　溝１断面図（1/30）



第20図　入溝２区遺構配置図（1/200）



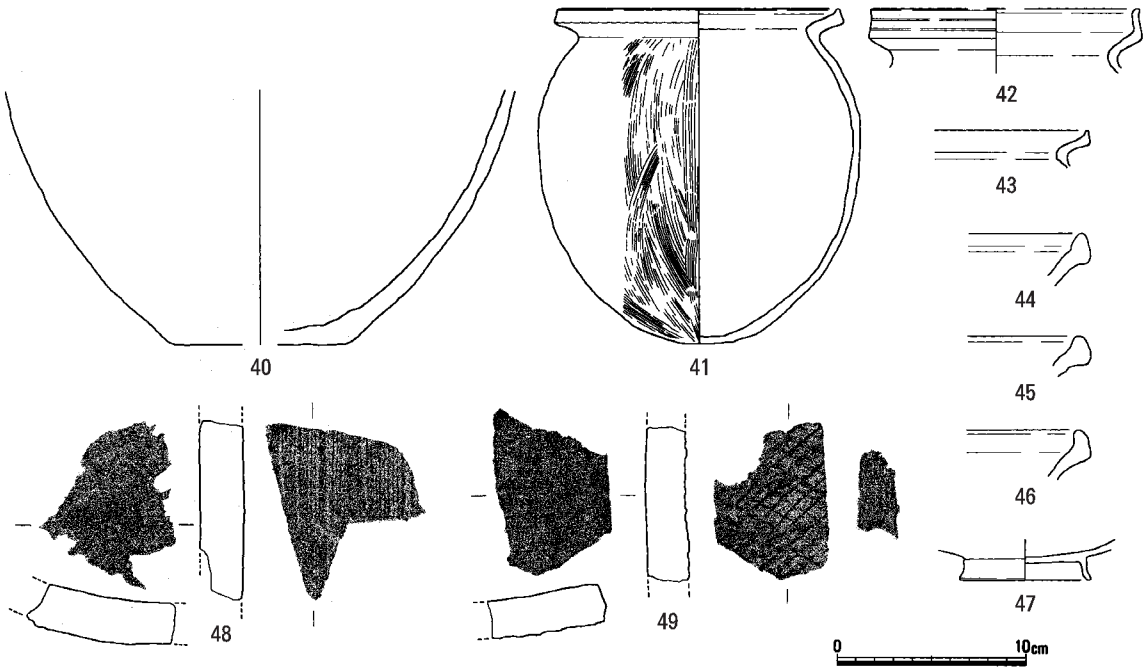
第21図　溝２断面図（1/30）



1　耕作土・床土
2　暗渠
3　淡黄灰色粘土
4　黄灰褐色粘質土
5　暗灰褐色粘質土
6　暗灰褐色粘土（溝２）
7　暗灰褐色粘土（たわみ）
8　淡黄灰色粘土（基盤層）

第22図　入溝２区北側壁土層断面図（1/100）

明である。42・43は甕の口縁部の破片である。いずれも入溝１区のたわみもしくは暗灰褐色粘土層からの出土で、時期は古・前・Ⅰと考えられる。44・45は入溝２区、46は入溝１区出土の東播系須恵器のこね鉢の口縁部とみられる。時期は12世紀後半か。48・49は入溝２区出土の平瓦である。48の凸面には縄目痕が見られるが、凹面は摩滅して細かい調整は不明。49は凸面に格子目の敲き具痕、凹面に粗い布目痕が観察できる。



第23図　入溝調査区出土遺物（1/4）

第４章　まとめ

第１節　発掘調査の成果

今回の調査では、調査範囲の大半が低湿地の様相を呈し、人の居住環境ではなかったことがわかった。八幡西１区で検出した大きな窪みも湿地帯に点在する沼などと考えられる。自然科学分析の結果からも比較的乾いた草地のほかに湿地や沼地の存在を示す植生が明らかとなっている。

入溝調査区の西半では遺物包含層・微高地の基盤層が把握できたものの、遺構・遺物ともに少なく、微高地縁辺部に位置する部分と考えられる。入溝調査区から用水・道路を挟んですぐ西の大道西地区では岡山市教育委員会による発掘調査が実施されており、弥生時代後期の遺構が検出されている。遺構は微高地の縁辺を巡る溝とみられ、現在の用水・道路部分に旧河道が存在した可能性もある（註）。

八幡西３区の溝１で出土した弥生土器については、量も少なく二次的に堆積したものと考えられるが、周辺に弥生時代前期の集落を想定できる遺物である。

第２節　杭列について

八幡西２区で検出した杭列については、前々回、前回の調査でも報告がなされている。前々回調査では、上面幅３ｍ基底部幅７ｍのほぼ南北に走る土手状遺構の両側で杭列を検出している。杭列の性格を護岸用、時期を平安時代としている。前回調査では、青灰色粘土層を削り出した土手状遺構の肩部に１列の杭列を検出し、その東側に排水用と思われる幅３～４ｍの溝状の落ち込みの存在を認めている。時期の推定できる遺物はなく、遺構の性格についての記述はない。

今回の調査成果から考察を加えるなら、まず、幅7.5ｍという大規模な施設にしては杭の方向などに規則性がみられず、粗雑な造りという印象である。土層断面の観察から２期にわたって構築されたことがわかる。すなわち、まず８層の上面に７層の比較的幅の狭い杭列が構築され、その後東に６・５層と拡張されて幅広いものとなったようである。また、杭材の直径は北半に比べ南半、特に調査区の南端で太い材を多く使用している。杭列が軟弱地盤の安定化を目的とした構築物であったならば、南北で原地形が異なり南側の方が比較的不安定な地形ではなかったかと思われる。杭列の築造時期については、出土した須恵器などから奈良時代と考える。遺構の性格としては、遺構の東西側に河道が確認できなかったため、河川に伴う護岸施設とは想定できない。南北方向に規則正しく一直線に並ぶわけでもないので、条里の区画とも考えがたい。考え得る構築物としては、後背湿地であったこの地区での新田開発に伴う防・排水のための堤、吉備中山の西裾の湿地帯を巡る道、あるいは両者の機能を併せもつものなどが挙げられようか。また、赤色顔料の塗彩された土師器など、出土遺物に官衙的な供膳具の性格をもつものも見られることから、周囲に公的な施設の存在を窺わせる。

（註）岡山市教育委員会草原孝典氏の御教示による

付載　奈良時代の杭列遺構に関する古植物学的検討

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

川入遺跡八幡西２区の発掘調査では奈良時代の杭列が検出されている。今回の分析調査では、杭列が構築された前後期の調査地点の古環境および杭材の樹種に関する情報を得ることを目的として、花粉・植物珪酸体分析・樹種同定を実施した。

2 調査成果

調査地点である杭列地点の堆積状況は本文第３章第１節を参照されたい。１～８層の花粉化石・植物珪酸体の産状に基づくと、調査地点周辺の森林植生は後背丘陵部などにモミ属、ツガ属、スギ属などの温帯性針葉樹もモザイク状に分布するアカガシ亜属を中心とした照葉樹林が成立し、林縁部や丘陵縁辺の河川沿いなどにはクマシデ属－アサダ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹やマツ属が生育していたと考えられる。本遺跡法万寺地区・仏生田地区で推定された古墳時代の植生は、アカガシ亜属を主体とした照葉樹林であったことから、マツ属二次林の分布拡大は古代以降と推定される。杭列に利用されていた杭材は、直径６～８㎝のモミ属の丸材であり、周辺に分布していたものを利用している可能性がある。一方、当時の遺跡周辺低地では、ヨシ属などのイネ科、カヤツリグサ科、ガマ属、オモダカ属、ゴキヅル属などが生育する湿地が存在したと推定される。その周辺にはタケ亜科などのイネ科やヨモギ属などの草本類が生育する比較的乾いた草地なども認められたであろう。栽培種のイネ属由来の珪酸体や組織片が５・７層以外の層準からは多産した。堆積物中にイネ属植物体が混入しているとみられ、調査地点周辺での稲作の可能性が考えられる。

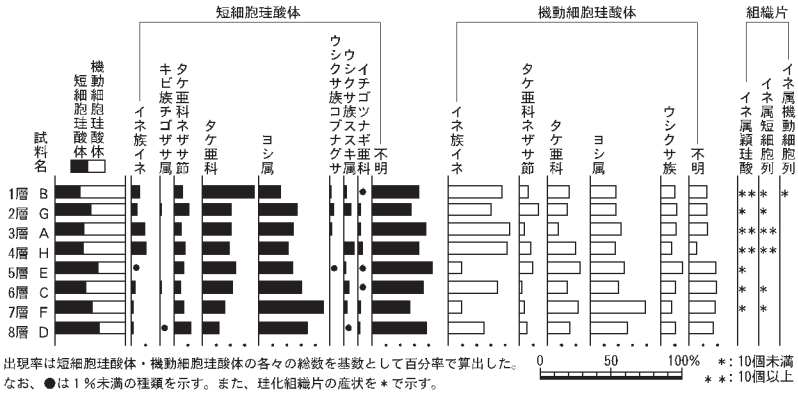


図１　植物珪酸体群集と珪化組織片の産状

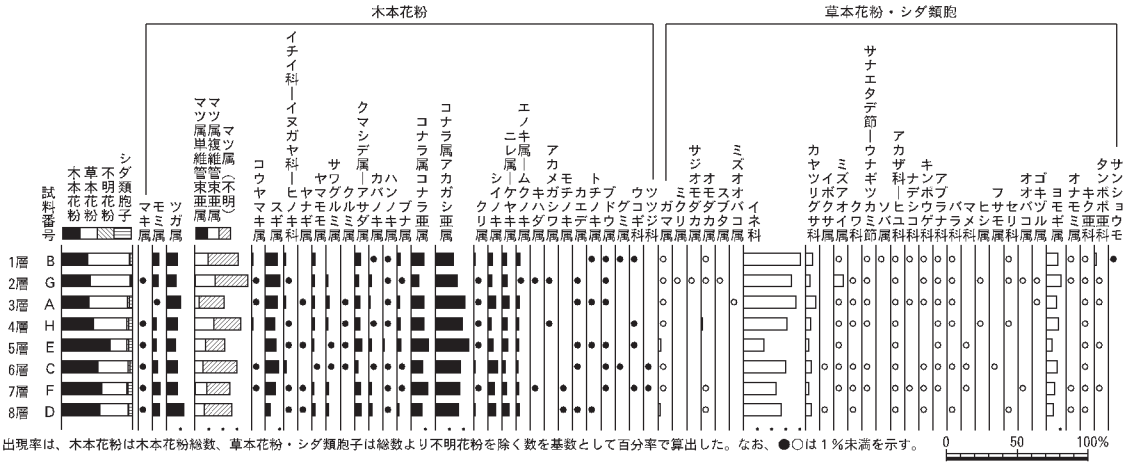


図２　主要花粉化石群集の層位分布

１　八幡西１区東半
（西から）

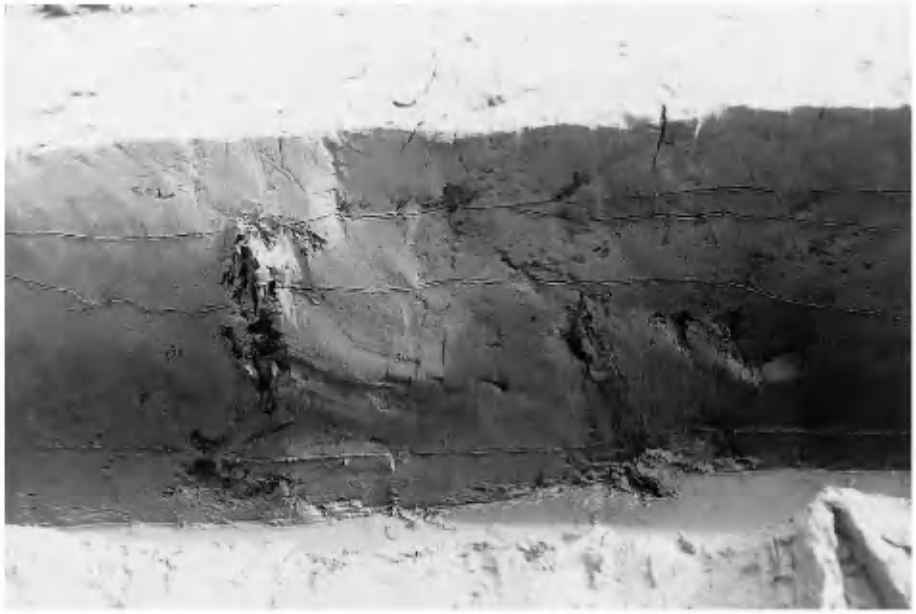
２　八幡西１区西半
（西から）

３　八幡西３区溝１
（南西から）

図版２

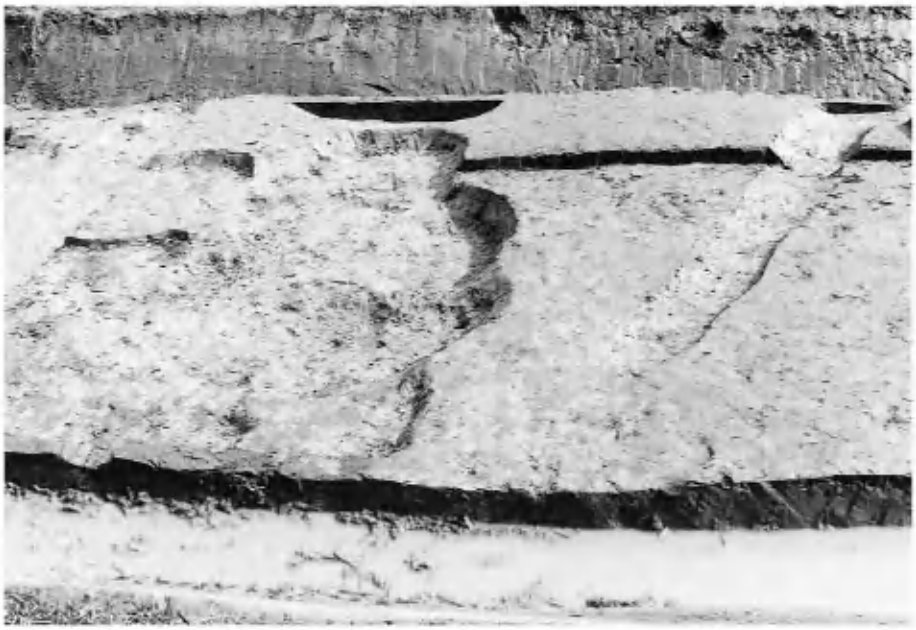
1　八幡西２区杭列
（東から）

2　八幡西２区杭列
（北から）



3　八幡西２区杭列
土層断面（北から）

１　入溝１区東半
（東から）



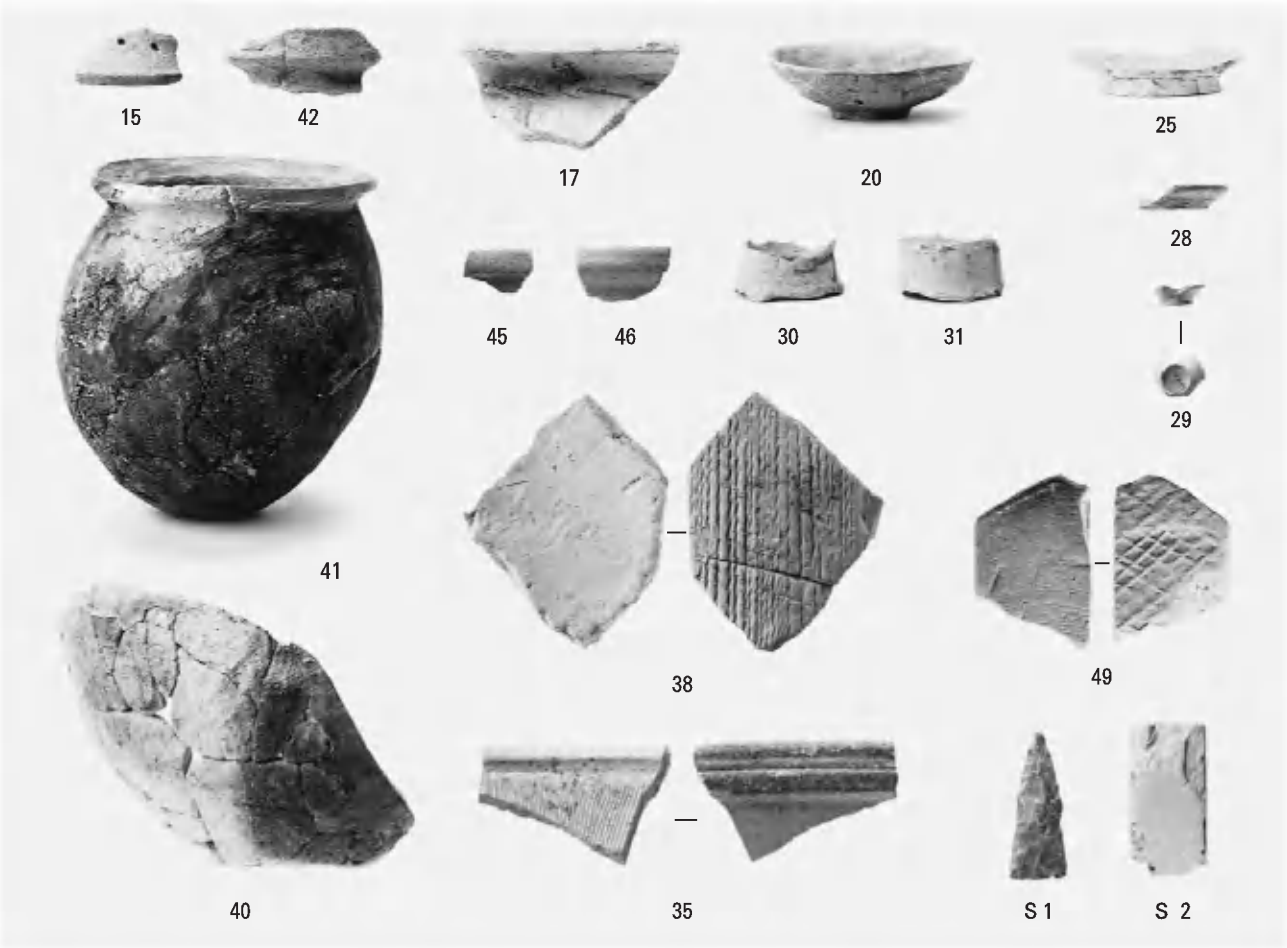
２　入溝１区溝１
・たわみ
（北から）

３　入溝２区溝２
（北から）

図版４

１　八幡西３区溝１出土弥生土器

２　八幡西２区杭列出土須恵器・土師器



３　遺構に伴わない遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かわいりいせき
書　　名	川 入 遺 跡
副 書 名	一般県道川入巌井線道路改築に伴う発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	186
編 著 者 名	小松原基弘　内藤善史
編 集 機 関	岡山県古代吉備文化財センター
所 在 地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL 086-293-3211
発 行 機 関	岡山県教育委員会
所 在 地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL 086-224-2111
発行年月日	2004年12月17日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
かわいりいせき 川入遺跡	おかやまけん 岡山県 おかやまし 岡山市 かわいり 川入	33201		34度 39分 03秒	133度 51分 01秒	20030401～ 20030829	1,775	道路の改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川入遺跡	集落	弥生時代前期 古墳時代前期 古代	溝 たわみ 杭列	弥生土器 土師器 須恵器	・古代の杭列を検出

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 186

川入遺跡

一般県道川入巌井線道路改築に伴う発掘調査

平成16年12月17日　印刷
平成16年12月31日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
　　岡山市西花尻1325-3

発行　岡山県教育委員会
　　岡山市内山下2-4-6

印刷　株式会社 三門印刷所
　　岡山市高屋116-7

R100
本文用紙は上級配合率100%再生紙を使用しています。